災害から命を守るために

近年、全国各地で発生している自然災害。夕方の雷雨や台風など、これまでに経験したことのないような被害が予想されます。「もしも」の時に自分や大切な人を守るためにできることは何か。地域で活動する皆さんのインタビューと共に、いざという時の備えを考えます。

令和３年８月の台風による大雨で崩落した林道長峰線（現在は復旧）

警察官として多くの災害の対応に関わった経験を生かし、防災アドバイザーとして活動している柿本さんに話を聞きました。

問危機管理課
TEL71-2119

地域で協力して災害に備える

狐島区防災会では、区が三川合流の近くにあり、標高も低い地域という特性上、特に水害への備えに力を入れています。地元の企業や穂高クリーンセンターと協定を結んで、避難所として利用できるようにしています。また、青木花見区と島新田区と合同で防災訓練を行い、北穂高地域としての連携を図っています。

訓練はアスリートと同じ。トレーニングをしないとすぐにできなくなってしまいます。繰り返し行うのはもちろんですが、こども園や小学校など小さい頃からの訓練も大切だと感じています。

地域と家族の力を高める

防災アドバイザーとして、日頃の訓練や啓発はもちろんですが、人材の育成に重点を置いています。人が暮らしている場所には、この先もずっと人が住み続けます。私が活動できるのは、その中のわずかな期間でしかありません。だから、災害が起きた時に先頭に立ってくれるリーダーが必要で、そうなれる人が多く出てきてくれるとうれしいです。

■プロフィル
元警察官。県内の大きな災害で人命救助に従事。定年退職後、安曇野に戻り防災アドバイザーとして活動中。

防災アドバイザー
柿本 豊さん（70・穂高北穂高）

そのためには、地域の力と家族の力を高めることが大切です。地域の行事などに普段から積極的に参加し、仲間づくりをすることが近道です。いざという時に顔と顔が見える存在であれば、安否確認や避難所での生活などがスムーズにできます。また、災害が起きた時に家族がそろっているとは限りません。お父さんがいなかったら…お母さんがいなかったら…そんな場合にどう行動するかも家族で話し合っておくといいですね。

命にスペアはない 早めの行動を

地震はいつ起きるか予想できません。しかし、水害は天気予報などの情報や過去の災害の歴史からある程度予想ができます。最近は、１０００年に一度クラスの災害が発生します。特に、夏から秋は大雨が多くなる季節。日頃からの備えをしっかり行い、警報などの情報に注意してください。

「このぐらいなら大丈夫」と思わず、災害時には「命にスペアはない。自分の命は自分で守れ」と胸に刻んで素早く、地域ぐるみで行動することが大切です。

VOICE
地元で活躍 消防団員の力

日頃から火災や自然災害に備え、いざという時にいち早く現場に駆け付けるなど、消防団として地域のために活動している分団長２人に話を聞きました。

第７分団（明科）
分団長　秋山 奨さん（37）

第 13 分団（堀金）
分団長　飯澤 良広さん（43）

過去の災害の経験生かし助け合う

明科は市内でも早いタイミングで早く避難指示が出やすい地域。過去にも犀川が氾濫水位を超えたり、集落に土砂が流入した経験があります。

その時に出動したことがある団員が多く所属していることもあり、地域を巡回する時「地域のマニアックな危険箇所」が話題になります。例えば、「この家は床下まで水が来る」とか、「この崖はよく崩れる」といった、地域で活動してきた経験から把握している細かい情報です。災害に備えるとは、まずは身の安全を確保するためにどう行動するかを確認すること。備品をそろえることも大切ですが、自分の住んでいる地域の特性を知り、有事の際に助け合えるよう日頃からコミュニケーションがとれる関係を築いておくことが１番ではないでしょうか。

暮らしながら地域の中で備える

例年お祭りや防災訓練に呼ばれるなど地域の皆さんと関わりを持っています。こういった活動に参加することでいざという時に地域の人がどこに集まるのか把握したり、顔が知れたりと、普段では分からないことが知れます。

４月に行方不明者の捜索で出動した際も、入り組んだ水路の経路を地域の皆さんに教えてもらいました。消防団では把握しきれていない情報はたくさんあるので、そういった情報はとてもありがたいです。また、消防団に入っていることで地域に溶け込めている気がします。私は出身が塩尻市なので、引っ越してきた当初は地域のことが全く分かりませんでした。しかし、消防団をきっかけに地域のいろいろな人と関わりを持つことができ、そのおかげで暮らしやすくなりました。

コラム　ある日、消防車に置かれた感謝の手紙

きっかけは「近所の友人や職場で勧められた」が圧倒的に多く、なかなか進んで入団する人が少ない消防団。現在の消防団員の平均年齢は約 37 歳と、まさに子育て真っ最中の世代です。地域に若い人が少ないこともありますが、団員が不足している分団も多い状況。だからこそ「入ってくれた若い団員は大切にしたい」と、インタビューした２人は言います。写真は、出動したある日、車に置かれた１通の手紙「おしごとおつかれさま」。消防団活動はこういった気持ちをもらえる活動です。